共に見た風景

前川美和

父の死

父の葬儀の日、小学二年生の純は、小学校の入学式に一度着たきりの紺のスーツを着せられた。母からは行儀よくするように言い含められていたので、母の隣でおとなしく焼香する人の列を眺めていた。葬儀が始まるまで、親戚のおばさんたちが大きな声でしゃべっていたので、純の耳に嫌でも父、哲の死に関する話が聞こえてきた。幼い純には分からなかったが、彼女たちは母に同情しているふりをしながら、父の死についてあれこれ詮索して楽しんでいるのだ。好奇心で目が踊っている。

「哲さん、まだ若いのに…。小さい子残して…。佐希子さんも大変ね」

「梅雨の大雨の降ってる夜中に、なんであんなとこ、車で走ってたんかな？」

「あそこ、道狭いし、右が崖になってるし、晴れてても危ないところよね」

「ブレーキの跡とかなかったとか…」

「雨、ひどかったから、消えてしまったんとちがう？」

純が母の方を窺うと、まっすぐに前を向いて、微動だにしない。紗の喪服を着た母は凛として美しかった。純が「お母さん、お母さん」と小声で何度呼びかけても、こちらに顔を向けてはくれなかった。

母子の生活

一級建築士だった哲は以前大手の建築事務所に所属していたが、三年前に独立して家に事務所を構えていた。独立してからは自分で仕事を取ってこなくてはならないが、口下手の哲にとって、その手の営業はなかなか大変だった。苦労して取ってきた仕事も施工主と工務店の間で、デザイン、安全性、利便性、価格などにおいて生じるギャップを埋めるためにかなりの労力を要した。そんな中、時間を見つけては、純を近くの公園に連れて行った。砂場の縁に座って、息子の遊びに気長に付き合い、自転車や縄跳びの練習をするときは、時々アドバイスをしたり、手を貸したりして、息子とのゆったりとした時間を大切にしていた。

「純、学校はおもしろいか？」

「うん」

「勉強はどうだ？　難しいか？」

「ううん、ぼく、勉強も好きだよ」

「何してるときが一番楽しい？」

「ええっとね、先生とクラスのみんなと一緒に外に出て、道端や公園に咲いてる花を見たり、どんな虫がいるか探したりするのが楽しいな」

「そうか、虫が好きか？」

「うん、小さい足で一生懸命歩いてるでしょ。かわいいよ。イモムシだってみんな嫌がる

けど、クニョクニョ動いておもしろいし、ぼく、大好きだよ」
「小さな虫だってがんばって生きているもんな。純は優しいんだね」
純はお父さんと話をしたり、遊んだりするのが大好きだった。
母親の佐希子は総合病院の看護師をしていた。勤務も変則的で夜勤にも入らなくてはならないため、家事や子供の世話もできる範囲で哲に助けてもらっていた。その大切なパートナーを突然失って、佐希子は立ち尽くすしかなかった。
純は、葬儀の日、母の白い横顔を見たとき、幼いながらも、これからは僕がお母さんを守るんだというような決意を固めていた。
佐希子は夫の死を契機に、夜勤もなく、木曜日と土曜日の午後も休める近くの病院で働き始めた。なるべく息子を一人にしたくなかったのだ。それでも、仕事の日の帰りは七時を回った。純は友達と遊んでいても、五時半には家に帰って、洗濯物を取り込み、畳んだし、米を洗ってスイッチを押し、風呂を洗った。
「純、いつもありがとう。助かるわ」
佐希子に嬉しそうにそう言われると、順は誇らしい気持ちになった。
「何か、僕にできること、もっとない？　ねえ、お母さん」
「ありがとう。今で十分よ。お友達と仲良く遊んだり、宿題もしっかりしないとね」
「うん！」
「純は大きくなったら、何になりたいの？」
「僕ね、お医者さんになりたいんだ。いろんなとこに行って、病気の人を助けるんだよ」
「そう。じゃ、いっぱい勉強しないとね」
「うん、がんばるよ」
純は三年生の時、夏休みの読書感想文を書くために、シュバイツァー博士の伝記を読んで、心を打たれた。何回も繰り返し読むうちに、こんな人になりたいと強く思うようになったのだ。母と二人っきりになって、しばらくは父のことを思い出して寂しかったが、一年も過ぎると、二人の生活にも慣れてきた。純はよく遊び、よく学び、よく母親を手伝って、名前の通り純粋な心の持ち主に育っていった。

佐希子の再婚

純が小学校六年生の時のことだ。夏休みに入ったばかりの土曜日、港で行われる花火大会に行くことになった。夏の花火大会は市のビッグイベントで毎年仕掛け花火が何百本も打ち上げられる。家から少し離れているし、帰りが夜遅くなることもあって、純はまだ行ったことがなかった。
「お母さんのお友達のおじさんが車で連れて行ってくれるんだって。純もおじさんに会ったら、ちゃんとあいさつしてね」
「花火祭り、一度行ってみたかったんだ。家の二階からも見えるけど、遠いから小さくしか見えないもんね」
「そうね。楽しみね」
「うん」
純は花火はとても見たかったが、母の友達のおじさんに会うのはちょっと億劫だった。

自分でもどうしてか分からないけれど、母と二人の方が楽しいのになと思った。
当日佐希子は鶯色の地にトンボの柄の浴衣を着て、臙脂の帯を締めた。髪をアップにして、薄く紅を引き、鏡に自分の姿を映し、三十四にしてはいけてると満足の笑みを浮かべた。純はいそいそと身支度をする母親の様子に心がざわついた。

今夜迎えに来てくれる滝本健三と佐希子は病院でであった。彼は佐希子の勤める病院の患者の一人だったのだ。滝本は左足を引きずるようにして診察室に現れた。
「バイクで転んじゃって、足がパンパンに腫れてきて…」
「いつ転んだんですか」
「えーっと、二日前かな。湿布してたんですけど…」
「レントゲン撮ってみましょう。少し外で待っていてください。すぐ準備しますから」
佐希子がレントゲンの準備をして、健三に肩を貸しながら、X線室に案内した。先生が撮影し、診察室でその写真を見ながら健三に言った。
「やはり左足首の骨が折れていますね。しばらくギブスをしないとだめですね」
「仕事は大丈夫ですよね」
「何をなさっているんですか」
「S金属の現場なんですけど」
「危険な職場ですね。足にギブスをはめると動きが鈍くなるから、座ってやれるようなラインに換えてもらえるといいんですが…。でないと、自分自身も危ないし、同僚にも迷惑がかかりますよ」
「上司に頼んでみます」
「じゃ、処置室でギブスをしてもらってください」
健三は処置室で佐希子に左足のふくらはぎからつま先にかけてギブスで固定してもらった。足を持ち上げてみると、思ったより軽いが、やはり動きづらい。ステンレス製の松葉杖を借りて、少し歩いてみた。
「うわっ！　なかなか難しいですね。脇にも力が入るし」
「滝本さんはがっしりしていて、お若いから、すぐ慣れますよ。骨もくっつきやすいと思いますよ」
「そうかな」
「まだ五月で暑くないから、そんなに蒸れないし」
「俺、きょうバイクで来たんだけど、これじゃ、乗って帰れないっすね」
「えっ！　そんな足でバイク乗ってきたんですか？」
「早いでしょ、バイク」
「どこにお住まいですか」
「ここからバイクで十分くらいのスーパーエッグの近くですけど」
「うーん、杖ついて歩くのはちょっとね。タクシー、呼んだ方がいいかな。あっ、ちょっと待って。今七時十分か。もう十分もすれば、わたし帰れると思うから、家近所だし、車で送っていきましょうか」
「いいんですか。よかった。じゃ、待合で待ってます」
佐希子は自分がどうしてあんなことを言ってしまったのか今でも不思議だ。普段患者さ

んはもちろん同僚も車で送ってあげることはしない。狭い空間に一緒にいるのが息苦しいし、当てにされるのも面倒だからだ。初対面の健三に何を見たのだろう。
佐希子ははやる気持ちに戸惑いながら、クリーム色の軽自動車に健三を乗せて走った。
「滝本さんはずっとS金属に勤めていらっしゃるんですか」
「ええ、工業高校を卒業してからだから、もう十二年になります」
「三交代はきついでしょ？」
「慣れればそうでもないですよ。夜勤の次の日は寝れるし、公休もあるから。年取るときついかもね。あっ、名前、聞いてなかった」
「西島佐希子です」
「西島さんもずっと看護師？」
「ええ、前は夜勤のある病院にいたんですけど、主人を亡くしてから、息子のためにあの病院に移ったんですよ」
「母子家庭ですか。うちと同じですね」
「えっ？」
「うちは生き別れですけどね。俺が中二で妹が小四のときです」
「そう。お母さん、小さいお子さん二人抱えて大変だったでしょうね」
「そうですね。でも、元気ですよ。あっ、そのスーパーの裏なんです。狭い道になるんで、スーパーの駐車場でいいです」
「そうですか。じゃ、裏に近いとこで」
「ありがとうございました」
「また病院で」
それ以来病院で会うたびに二言三言言葉を交わしあい、携帯のメイルアドレスや電話番号を交換した。互いの日々の出来事や思いをつづりあううちに、気心も知れ、二人の都合のいい日に外で会う機会を作った。佐希子は夫の死後、再婚しようと思う相手以外の男の人と息子を会わせるまいと思っていた。大人の煩雑な関係にいたずらに息子を巻き込んで混乱させたくなかったのだ。それで、健三との付き合いも純には知られたくなかったから、二人で会うといっても、昼ご飯を一緒に食べる程度だった。付き合いだして、一年ほど経って、健三の母親が佐希子にぜひ会いたいと言うからと、佐希子は健三の実家を訪れることになった。玄関を入ると、健三の母、京子がにこやかに出迎えた。
「いらっしゃい。狭い家ですが、どうぞ」
「こんにちは。西島佐希子です」
玄関の左手の壁には赤いバラの絵が飾ってあった。Kyokoというたどたどしいサインが見えた。
「これ、描かれたんですか」
「そうよ。下手の横好きですけど、楽しいですよ」
「油絵ですか」
「ううん。クレパス画。手軽だし、淡い感じに仕上がるのが好きなんです」
「いいですね。この赤」
居間に通されて、三人でいろいろ話した。
「健三は夫が出て行ってから、家事をよく手伝ってくれました。高校行ってからはバイト

もして、家計も助けてくれたんですよ。わたし、ずっと郵便局で働いてたんですけど、まだ家のローンも残ってましたし、この子を大学に行かせてやれんかったんです」
「母さん、俺、大学は行くつもりなかったよ。特別勉強したいことないのに、行ったってさ。俺、働くの好きだよ」
「そう言ってくれるのはうれしいけどね。何を勉強するっていうのじゃなくて、大学時代って、社会に出る前の大切な猶予期間ですよね。ゆっくり大人になっていくというか、自分に将来を決めるための四年間のような気がします。一見無駄な時間のようだけど、豊かに過ごせる時間ですよね。それを与えてやれなかったってうのは、親としてちょっとね。佐希子さんのお子さんは？」
「うちは小学生の息子が一人います。医者になりたいって言ってますけど、どうなることやら…」
「楽しみですね。看護婦さんのお母さんを見ているからかな」
「さあ」
「今度坊ちゃんも一緒に…。あの、ちょっと聞きにくいんですけど、佐希子さんは健三のことをどう思ってるの？　健三はあなたと結婚したいようだけど」
　佐希子は少し緊張しながら、自分の気持ちを説明した。
「健三さんはとてもいい方です。まっすぐだし、優しいし、健康な方です。それに、若い。わたしはもう三十五です。小六の息子もいます。健三さんにはこれからいくらでもいいご縁があると思います。ですから、正直言って、健三さんと今以上の関係に進むことにはためらいがあります」
「俺は佐希子と結婚したいと思っている。俺は母子家庭の大変さをよく分かってるし、そこで育つ子供たちの寂しさも…。だから、佐希子と純君と三人で、あったかい家庭を作っていけると思うんだ」
「健三に覚悟があれば、わたしは反対しませんよ。ただ、もうすぐ中学生になる男の子は急に現れた父親に戸惑うでしょうね。今までお母さんと築き上げてきた生活が一変しますしね。なかなか難しいと思いますよ。健三の覚悟がどの程度のものなのか…」
「俺は三人で幸せになりたいんだ。佐希子は六歳年上だからこそ俺をきちんと理解して支えてくれる。純君とは焦らないで、ゆっくり親子になっていけたらいいと思ってる」
「そう、分かったわ。佐希子さんは？」
「わたしは、健三さんがそんなふうに真剣に思ってくれてるのを知って、すごくありがたいと思います。でも…」
「佐希子は俺のこと、信頼できないのか」
「そんなことないわ。健三さんはわたしになんでも正直に話してくれるし、純のことも大切に考えてくれてる」
「俺と一緒に新しい家庭を作って行ってほしい」
「…ありがとう」
　二人のやりとりをそばで見ていた京子は、安心して、笑顔になった。
「二人がしっかり向き合っていれば、少々の困難には立ち向かえるはずよね。わたしでよければ、なんでも相談してくださいね」
「ありがとうございます」

二人は結婚の意志を固めて、花火大会の夜、健三は純と初めて顔を合わせることになったのだ。

近くで見る花火は頭の上から降ってくるようで迫力があった。ボン、ボンという音とともに、さまざまな形に弾ける色とりどりの花火が次から次に打ち上げられた。最後は川にかかった橋に仕掛けられた花火が虹色の滝を形作った。純は一言もしゃべらず、食い入るように花火たちを眺めていた。健三と佐希子は目で頷きながら、純の様子に安心していた。花火が終わって、三人はファミレスに入った。興奮気味の純は席に付いてからも、まだ花火を見ていた。

「やっぱ、近くで見る花火ってすごいな。花火の花びらが僕に向かって落ちてくるみたいだった」

「花火、好きなんだね」

健三の声で現実に引き戻された純は、初めて健三に対峙した。

「はい、なんか違う世界に入ったみたい」

「純君はお医者さんになりたいんだって？」

「はい。シュバイツァー博士みたいに病気の人を助けたいんです。でも、がんばらないと無理みたい」

「そりゃ、なんでも努力しないとな。いろいろ学んで、現場でトレーニング受けて、試験に合格して初めて医者になれるんだよ。中学入ったら、勉強しないとな。腹減ったな。何、食べたい？」

「僕、ハンバーグ！」

「佐希子さんは？」

純は佐希子さんと呼ばれた母をじっと見た。

「わたしはシーフードグラタンにします」

「よし、俺はカツカレーだな」

健三は注文したカツカレーをパクつきながら、純に声をかけた。

「純君は何か食べられないものってある？」

「僕、トマトがちょっと苦手です」

「俺も子供の時トマトとキューリは好きじゃなかったな。トマト食べなくても、他の野菜食べてたら問題ないよ」

「やっぱりね。　なのに、お母さんったら、食べろ食べろってうるさいんだから」

「まあ、お母さんっていうのはそういうものだよ。ハハハ…」

佐希子は二人のやり取りを微笑みながら見つめていた。

家に帰ってから、純は佐希子に聞いた。

「お母さん、あのおじさんと結婚するの？」

「純がいいって言ってくれたら、再婚したいと思ってるんだけど…」

「お母さん、死んだお父さんのこと、もう忘れちゃった？」

「えっ？」

「だって、お母さん、お父さんが死んでから、お父さんのことちっとも話さないし…。お父さんのこと好きだったの？」

「純、そんなふうに思ってたの？　お父さんのことは忘れたわけじゃないわ。お母さんは頭のいい優しいお父さんを尊敬していた。お母さんにとって、とっても大切な人生のパートナーだったし、何より純のお父さんよ。赤ちゃんだった純を二人で一生懸命育てたのよ。ただね、お父さんって無口だったでしょ。全部自分で決めて自分で実行する人だったの。お母さんは少し寂しかった。お父さんは運転を誤って亡くなったって純に話したよね。あの時は純もまだ小さかったから、本当のことを言わなかったけど、実は、お母さん宛に遺書があったの。つまりね、自殺だったの」
「えっ！　どうして？」
「お父さんね、自分で仕事するようになって大変だったの。建築士はね、家を設計しないと仕事にならないんだけど、家を建てたい人を探したり、工務店と予算の交渉したりしないといけないの。お父さんは一生懸命頑張ったんだけど、借金が、分かるかな、借金」
「うん、借りたお金でしょ？」
「そう。その借金が目茶目茶増えちゃって、どうしようもないところまで追いつめられたお父さんは一人で悩んで、一人で死んでしまったの。お父さんが死んだら入ってくる生命保険のお金で、借金を返してほしいって、遺書に書いてあった」
「お父さんは自分の命で借金返したってこと？」
「そうなるわ。お母さんに心配かけたくなかったんだろうけど、何も相談してくれないでって、とても悲しかった。寂しくて悔しくて…。夫婦なのに。だから、お母さんはお父さんのこと、ちょっと怒ってたんだ」
「そうだったの…。でも、滝本のおじさんって、お父さんとずいぶん違うよね」
「そうね。彼はよくしゃべるし、よく食べるし、よく笑う。一緒にいて楽かな」
純の心は「お母さん、結婚なんかしないで！　僕と二人でずっと頑張って行こうよ！」と必死に叫んでいたが、口から出たのは、それとは真逆の言葉だった。
「お母さんが、結婚したいのなら、僕はいいよ」
「そう、ありがとう」

新しい生活

翌年の春、健三と佐希子は結婚し、佐希子の家で暮らすことになった。純は中学校には滝本純として入学した。テニス部に入り、毎日暗くなるまでボールを追いかける日々を送っていた。健三は晩御飯を一緒に食べるとき、純に学校の様子などを尋ねた。
「クラブは楽しいか」
「うん、でも、まだボール拾いとか素振りしかさせてもらえないんだ。早く打てるようになりたいのに」
「まず体力をつけさせるのと、やる気のないヤツを振るい落とすんだろな」
「へえ。じゃ、しっかりついて行かなくちゃね」
「素振りは基本だしな」
健三は純と接する時間を作ろうと努力していたが、三交替制の職場なので、純が学校から帰ってきても、寝ていることも多く、現実の生活に入ると、純と話す機会は案外少なかった。

純はクラブで帰りが遅い時は深夜まで宿題をしていることがある。そんなとき、二階の自分の部屋から一階に降りていくと、たまに夫婦の部屋から何か激しく動いている気配を感じることがあった。中学生にもなれば、男と女のことも少しは分かってきている。母の女の匂いを嫌でも感じてしまって、裏切られたような気持になった。そんな自分の感情が間違っていると頭では理解していたが、心をコントロールするのは難しかった。その頃から、純の瞬きの頻度が不自然に多くなってきたことに、佐希子は気づいていたが、一過性のものだろうと、あまり深刻に受け止めていなかった。

再婚した次の年の秋、佐希子は三十六歳で男の子を出産した。男の子は「明」と名付けられた。初めての自分の血を分けた子どもに興奮する健三と、幸せそうに微笑みながらわが子を抱く母の姿を、純は他人を見るような突き放した目で眺めていた。純にとっても明はとてもかわいい存在で、その柔らかな頬や小さな手をいつまでも触っていたかったし、クルクル変わる表情はいつまで見てても飽きなかった。でも、健三、佐希子、明の家族の図の中に、純は入っていくことができなかったのだ。疎外感からか純の帰宅時間が一段と遅くなった。本人は塾で先生に質問していたとか試合前でクラブが忙しいんだとか言い訳をしていたが、実際は部室や自習室に一人残ってボーっとしていることが増えていた。

健三は家にいるときは純に声をかけることを怠らなかった。純の寂しさを想像できる優しさを持っている人だったのだ。

「純、どうだ、学校は？　テニスはうまくなったのか」

「う、うん。は、春は試合に出るんだよ。シ、シングルもダブルスもね。ク、クラブの友達もできたし、順調だよ」

「そうか。今週土曜の夜、空いてるか？　公休日だから、どっか食べに行こう。何が食いたい？」

「か、回転ずしかな」

「よし、決まりだ」

二人の会話を聞いていた佐希子は健三と二人きりになったとき、心配を口にした。

「あの子、どもってるわ。大丈夫かしら。あなた、純の瞬きが異常に多いのに、気が付いてた？　何か精神的なものかしら」

「母親の再婚、出産と続いたからね。あの子なりに受け入れるのにエネルギーが要るんだろな。一時的なものだと思うけどな」

「うーん、一応病院に行っといたほうがいいかしら」

「何科に行くんだい？」

「心療内科かな」

「そこって心の病んだ人が集まってくるんだろ？　純はスポーツもしてるし、友達もいるし、健康だと思うけどな」

「そうね。もう少し様子を見ようかしら」

純はテニス部を三年の夏の大会で引退し、そのあとは受験勉強に集中した。もともと集中力に関しては並外れたものを持っていたので、学校の授業は授業中に完全に理解できていたし、宿題は真面目にこなしていたから、受験勉強はそれほど苦にならなかった。塾で解答テクニックや出題傾向を教わった甲斐もあって、公立のトップ校に合格した。

純の青春

　その高校は進学校とはいうものの、校則もあってないようなもので、伸び伸びと自由な校風を特色としていた。たとえば、パーマをかけた生徒や変形制服を着た生徒もいたが、そんな生徒たちも勉強や行事には積極的に参加するというふうな学校だったのだ。純の入った特進科は、併設された普通科とちがって、国公立、有名私学への進学をもの的とした学科で、一クラスしかなかったので、今のメンツの四十三人が三年間ずっと一緒に学ぶことになる。クラスメートは、みんな心が広く、能力や考え方、行動の多様性をすんなり受け入れることができるタイプか。〝集まっていた。そのことが、純にはラッキーだった。誰も純のチックや吃音を笑うものはいなかったのだ。先生方からは大人し過ぎて覇気がないクラスだとか言われたが、仲の良い穏やかなクラスだった。純にとって生涯で最もキラキラと輝いた幸せな時代の幕開けとなった。

「今日四時間目、自習だ」
「ラッキー、ソフトやろうで」
　掲示板の前で、純と坂本聡と土田良平が顔を見合わせた。純は、早々に写真部に入部した聡と、すでに帰宅部を決め込んだ捉えどころのない良平の二人となぜか気が合ってつるんでいることが多い。特進クラスの男子は自習時間があると、みんなでソフトボールをして遊ぶのが常だった。
「また男子、ソフトボールしてるよ。好きだね」
　子どもっぽい男子を半分バカにしながら、井浦和、沢村由紀、南出昌美、冴木加代の四人は学校を抜け出し、隣の神社に、散歩がてら、おしゃべりに行く。境内の砂利道を歩くと、ザクザクと音がする。五月も半ばになると、風も光も暖かい。ゆっくり歩きながら、由紀がみんなに聞く。
「ねえ、クラブ、もう入った？」
「わたし、コーラス部に入ったよ。部長がとってもしっかりしてるし、部員もたくさんいて活気もあるし」と昌美。
「昌美、歌好きなん？」
「本当はフォークソング、好きなんだけどね。和は？」
「美術部に入って、油絵描きたいと思ってる。でも、部室に行ってみたら、だれもいなくて…。まだ入ってないんだ」
「わたしも美術部に入ろうと思ってるんだけど、活動してないクラブかな」
　由紀が心配そうに和を見た。
「まあ活動してなくても、部はあるんだから、入部して絵をかけばいいんと違う？　顧問の先生いるはずだし。加代はどうするの？」
「うーん、わたし、小説家になるのが夢なんだ。だから、クラブする時間があったら、小説読んだり、書いたりする時間に回したいな。帰宅部かな」
「えーっ！　小説ってすごいね」とみんな興味津々。
　わいわい言いながら、おみくじの自動販売機のところにやってきて、みんなで引いた。
「大吉」だの「末吉」だの騒いでいると、水色の袴をはいた神主さんがやってきた。

「君たち、授業中でしょう？」
「自習なんです」
「自習の意味が分かりますか。きちんと自分で学習するということですよ。学校から出てきて、ブラブラしていてはいけませんよ」
　神主さんに叱られた四人は、すごすごと学校に戻った。戻ったものの、あと十分で四時間目が終わる時間になっていたので、学生ホールで何か食べようということになった。各自、うどんやそば、アイスクリームなど望みのものを手に入れて、テーブルの一角に陣取った。
「どうして、うちの学校の食堂にカレーライス、ないんだろ」
「普通あるよね」
　不満を言いつつ、勢いよくうどんなどをすすっていると、同じクラスの男子たちががやがやと入ってきて、離れたテーブルを占領した。
「ねえねえ、加代。加代は滝本君と中学校一緒だったよね」
「そうだけど」
「あの子、いつも食堂でパンと牛乳買って食べてるよね。お弁当とか作ってもらえないんかな」
　和は日ごろから気になっていた疑問を口にした。
「あの子のとこ、ちょっと複雑みたい。あんまり家のこと言わないけど、お父さんが死んで、あの子が中一のとき、お母さんが年下の男と再婚して、今二歳か三歳の弟がいるんよ」
「うわっ、きつそうだ。何か生々しいね、お母さん」
「まあ、どこでも生々しいけどな。男の子にとってお母さんって聖女みたいなものだっていうから、つらいかもしれないね」
「そうかもね」
　みんな納得すると同時に、滝本君に対して同情と興味の入り混じった感情を共有することになった。
　女の子たちは食堂を後にして教室に戻り、弁当を食べることになる。食欲全開、成長期の真っただ中にあるのだ。当然五、六限目は自然の摂理で眠くなる。その日は五限目が現代国語ということで、皆撃沈していた。和もウツラウツラしながら、隣の男子を見ると、机に突っ伏していた。よく見ると、涎が机から一直線に垂れて、床に小さな涎だまりを作っていた。熟睡してるんだと感心しつつ、本文を読みながら机の間を通り過ぎる先生の耳を見ると、密集した耳毛がぶわっと飛び出しているではないか。笑いをかみ殺し、和は前の席の由紀と斜め後ろの昌美に涎と耳毛に注目するようサインを出したり忙しく、どうにか爆睡を免れた。
　六限目は数学だ。数学の先生は人柄はいいのだが、数学的センスに欠けているのではないかとクラス全員が思っていた。自分で書いた数式の証明を途中で間違い、黒板の前で一人往生することはしょっちゅうだった。そんなときは滝本君が優しく間違いを指摘して解決するのだが…。他の生徒は前を見ている振りをして、思考をストップさせていた。「先生また黒板と仲良くし始めたぜ、しかたないな、もう」と許している。証明の後は宿題の答え合わせ。先生に当てられた生徒は黒板に答えを書きに行く。和は分からなくて放っておいた問題を当てられて、焦った。ヘルプのサインを出しても、みんな首を横に振るばかり

で、パニックになっていると、解説付きの回答のメモが回ってきた。二つ向こうの列の滝本君がこっちを見て笑っている。「助かった」と微笑み返しをして、板書に走った。数学に関しては純の能力は群を抜いていた。先生がみんなの解けない問題を最後に当てるのが純だった。「頭の構造が違うんだろうな」と和は一目も二目も置いている。しかも、純は運動音痴の和と違って、テニス、サッカー、バスケットなどなんでもこなした。勉強もスポーツもできて、色白で薄い茶色の髪と瞳を持ち、背がスラッと高い純は、クラスの女の子たちに人気があった。それを面白くないと感じる男子生徒もいるにはいたが、純があまりにもまっすぐで、心にあることを正確に伝えようと頑張るので、「あいつには敵わない」と白旗を揚げた。

純は高校生になって、ずいぶん楽になった。父や母との距離の取り方も分かってきたのかもしれない。何よりも今のクラスは居心地がよかったし、聡と良平という全く異なるタイプの友達もできた。写真好きの聡は、高校生にしてはいいカメラを持っていて、純と良平を誘って、海や山やお祭りなどを撮りに行った。三人は自転車に乗って、あちらこちら出かけ、山の上から下界を眺めたり、時の経つのも忘れ、キラキラ輝く海がだんだん暗く変化していく様子を無言で見つめたりした。三人は互いの空間を分け合い、同じ風景を見ていたのだ。

この時期、純の心には初恋らしきものも芽生えた。入学したときから、小柄でオカッパ頭の気の強そうな井浦和のことが気になっていた。教室では時々白目を剥いて居眠りしていることもあるが、たいてい何かを発見してひとり面白がっている。誰も答えられない英語の長文読解を先生に当てられ、すらすらと答えて、どや顔したり、数学で分からないときは真っ赤になって慌てたり、感情がそのまま顔に出て、見ていて飽きない。特に数学の先生が黒板の前で困っていると、何とかしてやれ的な目線を純に送ってくるのがたまらない。二年になった五月のある日、純は聡と良平に聞いた。

「い、井浦さんって、どう思う？」

「どうって、おまえ好きなんか？　うーん、頭よさげで真面目で、俺、ちょっと無理や」

と良平。聡は和の意外な一面を披露した。

「真面目っていうのとちょっと違うかも。でも、気が強いのは確かだよ」

「何か知ってるのか？」

良平は身を乗り出した。

「あいつ、去年の文化祭の時、学校抜け出して、一人で映画見に行ったんだぜ。学校に戻ってきたところを体育の先生に見つかって、『どこに行ってたんだ』って聞かれて『つまらなかったから、映画見に行ってました』って悪びれる様子もなく答えてたよ。先生は目が点になってたな」

「恐ろしいやつだ」

びびる良平に、純は宣言した。

「ぼ、僕は井浦和と付き合う。今から井浦さんの家に電話する」

「怖いもの知らずめ！」

二人は好奇心をむき出しにして、純の電話に耳を傾けた。

「もしもし、い、井浦さんのお宅ですか」

「はい、そうですが」

「か、和さん、いますか。ぼ、僕は高校でクラスが一緒の滝本といいます」
「はい、ちょっと待ってね」
和が受話器を取って、恐る恐る電話に出た。
「和です」
「た、滝本です。あ、あのですね。えーっと、どうしようか」
良平たちが「アホ、早くなんか言え！」とか電話口で騒いでいる。
「だれか、そこにいるん？」
「そ、そう、坂本君と土田君」
「おまえ、何言ってんだ？」とまた裏方の声がする。
「なんか用なん？」
和の冷たい声で、さらに緊張する純。
「ぼ、ぼ、僕とデ、デートしてください。今度の日曜日」
「えーっ、デ、デート？」
「そ、それで、駅前の本屋で一時に待ってますから。さようなら」
「ちょ、ちょっと、さようならって…」
ぎごちないデートの誘いだったが、和はドキドキしていた。滝本君のことは憎からず思っていたし、和にとっても初めてのデートだったのだ。
デート当日は快晴で、暖かいというよりむしろ暑いくらいだった。和は熟考したあげく、黄色の半そでのTシャツと緑に花柄のミニスカートを履いた。本屋に少し早く着いたので、問題集などをパラパラめくっていると、純が笑顔でこちらに向かってきた。なんと白いシャツと黒いズボン。つまり、制服で現れたではないか。和は「あり得ないわ」と思うと同時に「ってことはないか、滝本君だから」と心の中でつぶやいた。彼は開口一番。
「な、何を話そうかって、ずっと考えてきたんだけど、い、井浦さんの顔、見たら、ぜ、全部、忘れちゃった」
和はどう解釈すべきか分からず、あいまいに笑うしかなかった。二人はぎごちない会話を交わしながら、デートで訪れたカップルは必ず別れると言われるお城まで、三十分ほど歩いた。お城に着いて、一面クローバーの群生する広場に腰を下ろし、なぜかクローバーの葉をむしりながら、二人はお互いの将来の夢などを語り合った。
「ぼ、僕は医者になりたいんだ。ドイツ人のシュバイツァー博士のように病気の人を助けたいんだ。博士はキリスト教信者でもあったから、三十歳からは人のために尽くそうと決心して、医者をめざし、アフリカのザボンのランバレーネというところに病院を建てて、無償で患者を診たんだ。す、すごいよね」
「じゃ、医学部、目指してるん？」
「そ、そう、まだ模擬とかで合格圏内に入ったことないけどね」
「医者になるまでにインターンとかもあるから、だいぶかかるよね」
「うん、こ、国家試験に合格しなくちゃいけないし…。井浦さんは？」
「わたし、生命の起源に興味があるんだ。オパーリンの本、読んだことある？」
「し、知らないな」
「そう。そんなこと、どの大学に行けば学べるか分からない。うち、経済的な問題も抱えてるから、あんまり大学の選択肢はないしね」

「せ、先生に聞いてみたら、どう？　何か情報持ってるよ。きっと」
「わたしね、先生に相談するなんて考えられないの。なんか信頼できない。わたし、滝本君みたいに純粋じゃないからね。今は一応理系の学部、目指して、入ってからまた考えようと思ってる。滝本君は目標、ぶれないからいいね」
「ま、まあね。母が看護師してて、応援してくれてるから、が、がんばらないとね」
「そうなんだ。お母さんのこと、好きなんだね」
「えっ、ど、どうして？」
「なんとなくね」
　こうして、二人のかわいらしい付き合いが始まった。純はほとんど毎日和に電話した。昼間同じクラスにいるけれど、二人で話すことはなかったのだ。
「ぼ、僕、学校の帰り、動物園に寄ったんだ」
「一人で？」
「うん。で、ロ、ロバの檻の前でしばらくいたんだけど。ロバが近づいてきて、僕のことじっと見て、涙を一粒こぼしたんだ」
「ロバが泣いたの？　それって…滝本君が…。何かあった？」
　和の思いがけない言葉に純は戸惑った。
「えっ？　ど、どうして？　何もないよ」
　そう答えながら、前日に母からまた妊娠したことを聞かされて、少しショックだったことを思い出していた。母が幸せなら、何も問題はないはずなのに、素直に喜べない自分がいた。いまだに健三をお父さんとは呼べない己の偏狭さを純は持て余していた。
　三年の夏も近づくころになると、大学受験がいよいよ具体的に迫ってくる。聡は物理を勉強したいと東京の理科大学をめざし、良平は地方公務員になるんだと言って公務員試験の問題集に取り組んでいた。
「なんで、公務員なんだよ。安定志向だな」
「大学で何か勉強したいことないのかよ」
　良平は二人にそんなふうに突っ込まれても、涼しい顔で答える。
「結局社会に出て、働いて生きて行かなくちゃならないんだよ。大学、出たって就職あるとは限らないよ。安定志向のどこが悪いんだ。聡は物理の先生、純は医者、俺は公務員でいいじゃないか」
「生き方はいろいろあっていいと思うよ。ただ、良平が急に進路変えちゃったからさ」
「俺のおやじ、正月に脳梗塞で倒れたんだ。早く病院に行ったから、死ななかったんだけど、なかなか回復しないんだよ。今もあんまり表情もないし、言葉もしゃべれない」
「おまえ、長男だよな」
「ああ、だから…」
「そうか」
　みんなに平等に自由に羽ばたける羽がついているわけではないと、三人は実感していた。
　秋になると、受験生たちはかなり焦りのモードに入る。志望校の受験科目にない教科の時間にこっそり内職をする生徒も増えてきた。ある日、世界史の時間に英語の勉強をしていた真面目な女子生徒が、先生に見つかってきつく叱られていた。そのとき、純が立ち上がって、先生に言った。

「せ、先生、ぼ、ぼくたち、時間がないんです。授業の邪魔はしてないんだったら、自分の受験に必要な勉強をすることを大目に見てほしいんです」
先生は面と向かって、内職を認めるように迫る純を前に困ってしまった。
「今すぐ役に立たないから無駄だと自分で判断して、あんまり近視眼的に捨てていくと、やせ細った人間が出来上がってしまうんだがな。まあ、お尻に火のついた君らに言っても、聞く耳ないかもしれないな。役に立たないと思っていたことにいつかとても興味を持ったりするものだが」
先生は寂しそうにみんなの顔を見渡した。純はその日、和に電話して、自分の言ったことに対して、和の意見を求めた。
「先生はやっぱり内職、認めたらだめだと思うよ。先生は何に関しても基本的な知識くらいは持っておくべきだというスタンスで教えてるはずだよ。わたし、個人的には内職は先生に対して失礼な行為だと思うよ。そんなに自分の勉強したかったら、家に帰るなり、図書室に行くなりすればいいじゃない？」
「そ、そんなことしたら、欠課になってしまうよ」
「それぐらいの代償は払わないとね。わたし、日本史の授業嫌いだから、時々図書室に屯ずらするよ。あの先生、汚い字で書いた古いプリント配って説明するだけだし」
「うわっ！　そ、そんなことしてたん？」
「うん、テスト、いつも九十点以上取れるしさ。暗記ちょっとしたら、点数とれるようなテストしか作らないでしょ、あの先生。担任も何も言わないし」
「じゃ、こ、今度二人で学校サボって図書館に行って勉強しようよ」
「いいかもね」
二人は示し合わせて、無断で学校を休み、お城の近くの図書館で思い思いの勉強をした。二人で向かい合って、黙々とペンを走らせていただけだけど、二人とも楽しかった。九時から昼の二時ごろまで図書館で頑張ってから、自転車で移動し、喫茶店に入った。純はスパゲティーを注文したが、和はカバンから弁当を出した。
「せっかくお母さんが作ってくれたから」
喫茶店でいきなりガチャガチャ弁当を開けて、惣菜のにおいをプンプンさせながら、モソモソ食べている女の子、これが和なんだと純は納得した。
「か、和、僕たちの最後の文化祭、クラスで何か出ようか」
「卒業だものね。そういや、加代は有志で時代劇、やるって言ってたよ。『必殺仕事人』かな」
「そ、そうか。じゃ、僕たちも仲間を募って、コーラスでもする？」
「昌美、コーラス部だったよね。その辺からメンツ探そう」
ということで、二人はコーラスに参加してくれるよう、みんなに呼びかけ、男子は純、聡、良平、ゲジゲジ眉の和也、スズメの巣のような髪の毛の隆広、陰気な正志の六人が集まり、女子は和、昌美、由紀に、美声の由美、大口の裕子、メガネ美人の陽子が加わった。選曲では演歌がいいとか、アイドル系がいいとかちょっともめたが、結局フォークの王道とも言うべき「翼をください」をはじめ、当時みんながよく口ずさんでいたフォークを五曲することになり、放課後になると、昌美の指導の下、発声練習から、ハーモニーのつけ方まで一生懸命練習した。劇に出演するメンツは水泳棒に毛糸を縫い付けてカツラを作っ

たり、大道具だの小道具だの色々準備するものがあって大変そうなので、クラスのみんなで手分けして制作に励んだ。みんな遅くまでクラス一丸となって文化祭に臨み、どの子の顔も輝いていた時間だった。

本番では、時代劇の照明や効果音はクラスの男子が担当し、純も血糊を持って障子の後ろに隠れてスタンバイしていた。加代は自前の長い髪を日本髪風に結って、色っぽく、前列の男子たちから盛んに声援が飛んでいた。コーラスのほうは場違いなほど真面目なステージとなったが、それはそれで意外に新鮮でよかった。こうして、高校生最後のイベントはみんなの中でいい思い出となって残ったのだ。

別れ

文化祭が終わると、受験勉強一色となり、みんな目の色を変えて、ラストスパートとなった。結果、和は通える公立大学に、聡は東京の志望校に合格したが、純は地元の医科大学に合格することができなかった。純はかなり落ち込んで、自分の何が悪かったのかあれこれ考えた。理科二科目の準備が甘かったのかとか、高三の夏休みに家族とキャンプに出掛けて、一週間勉強しなかったのが響いたのかとか、文化祭で浮かれすぎたせいなのかとか、思い当たることはいっぱいあった。和は慰め、励ましてくれたが、和への気持ちが一番のネックだったのかもしれないと思い至った。恋愛感情は勉強を妨げるとよく言われるではないか。浪人して医学部を目指すのならば、勉強の邪魔になるものはすべて排除して必死でがんばらないといけないという結論に達した純は、即行動を起こした。和と別れる決心をして、電話をしたのだ。

「ぼ、僕、予備校の寮に入って、この一年受験勉強に専念するつもなんだ」

「えっ？　予備校の寮？　家を出るの？」

「そ、そう、その予備校は医学部専門で、全寮制なんだ」

「すごいね。社会から隔離された環境で勉強するんだ」

「だ、だから、もう和とは会わないし、電話もしない」

「何、それ？　なんか一方的だね」

「そ、そうかな」

「そうでしょ？　私は純にとって一体何だったの？　友達？　恋人？」

「さあ、分からない」

「受験という同じ目標に向かっているただの勉強友達だったのかな。目標が別々になったら、さよならって感じ？」

「そ、そんなふうに思ったことないけど…」

「純は自分の家族のこととか全然話してくれなかったものね」

「……」

「わたしが今純にしてあげられること、何かある？」

「…ない」

「そう…。　わたし、純の勉強の邪魔なんだ…。じゃ、どうしようもないわね。自分が納得するまでしっかり勉強してね。合格、祈ってるわ」

「あ、ありがとう。じゃ」

「「うん、さようなら」

それっきり毎日のようにかかってきた電話は二度と鳴らなくなった。和は、失ってみてはじめて、純という存在の大きさを知った。和が今まで出会った中で一番美しい人だった。純にはいつもまっすぐで、人を妬んだり、疑ったり、人の言動を曲解したりすることは皆無だった。たまに、残酷なくらい率直だと感じることもあったが…。和は時々そんな純を前にして、自分の俗物性が純を汚してしまわないか心配したが、それは杞憂だった。逆に和の心が純の美しさに浄化されたようだった。和は純への気持ちを引きずりながら、大学生活に入った。

大学

和は大学で無味乾燥な一般教養の授業にがっかりした。大学に対して期待度が高かっただけに、気力が萎えがちになったが、テニスサークルにも入り、真っ黒に日焼けしてボールを追いかける日々を送っていた。友達も何人かできたが、純を忘れることはなかなか難しかった。

大学一回生の夏休み、喫茶店でウェイトレスのバイトをしていたら、偶然純が友達と一緒に店に現れた。和はドキドキしながら、注文を取りに行った。純は和の方を見ようともせず、「コーヒー」とだけ告げると、友達と夢中で話し始めた。和がコーヒーを運んだ時も、純はまるで和など存在しないかのように、友達だけに視線を向けてひたすら何かしゃべり続けていた。和はショックを受けると同時に、何かとても異様なものを見てしまったようで戸惑った。こんなに近くにいるのに純にはわたしが見えていない。視野の病的な狭さとでもいうのだろうか。

和は一年後、純が医大に合格したことを地方紙で知った。ひょっとしたら連絡をくれるんじゃないかと期待したが、音沙汰がなかった。和は純のことは忘れようと思った。忘れることにエネルギーを費やした。

純は受験に失敗してから、がむしゃらに勉強した。寮に入ったので、誰からも邪魔されることもなく、思い切り勉強に取り組めた。息抜きに、好きなビートルズを聴いたりしたが、ほとんどの時間を数学と物理と化学の勉強に当てた。隔離された空間で、難問が一つ一つ解けていくのが楽しかった。予備校では昼休みなどにみんなと情報交換したり、成績を比べあったりすることはあったが、基本的に一人で行動していた。だれかと協力して何かするというような付き合いはなく、無機質な時間が淡々と流れて行った。

そして、一年後、志望校に合格した。達成感はあった。父も母も喜んでくれた。これから本当の勉強が始まるんだと期待に胸を膨らませ、階段教室に足を運んだ。ところが、純には講義の内容も周りの学生たちの話も耳に入ってこなかった。日本語で話しているのではないように感じた。受験勉強で嫌というほど数学や化学を勉強したはずなのに、大学の講義が理解しにくく、さまざまな概念がそこらへんを飛び回っているイメージに捕らわれて焦った。それでも、純は前向きに努力した。課されたレポートはなんとか提出したし、グループワークのときは学友たちと意見を交わし、彼らの主張を理解しようとした。

純の繊細さと純粋さは大学でも周りの学友たちをひきつけた。ただ、高校の時のように

温かく受け入れられたのではなく、自分たちとは異質の珍しいものに関心を寄せるといった類のものであった。純と同じグループに属している伊集院猛も純に興味を持って、医大付属の看護学校に通っている妹の美香に、ことあるごとに純のことを話した。
「俺のグループに変なヤツがいるんだ。純っていうんだけどさ。この前教授が講義をしているとき、急に立ち上がって、『先生、シュバイツァー博士をご存知ですか』って質問したんだぜ。それも、大真面目な顔をして。『僕、とても尊敬してるんです』だってさ。教授も面喰ってたけど、真面目な純を見て、『尊敬できる医師がいることはいいことです。しかし、シュバイツァー博士に関しては独りよがりのところも多々あったようですから、君も自分で博士についてもっと調べてごらんなさい』って助言してたよ」
「先週グループで出さなきゃいけないレポートあってさ、面倒だから、純に任せたんだよ。そしたら、あいつ、いろんな文献調べて、百枚近いボリュームのレポート出したんだぜ。十枚程度でいいのにさ」
「あいつ、何に関心あるのか、さっぱり分からないよ。みんなで彼女の話してても乗ってこないし、何を見てるのか分からないときもあるんだ。真面目なのかバカなのか…」
さまざまな純情報を聞かされた美香は兄に尋ねた。
「お兄ちゃん、その純って子のこと好きなの？」
「いや。理解できないから、気になってウザい感じだな」
「わたしに紹介してよ。わたしも興味が出てきたわ」
「そうだな。おまえなら、あいつの本性が分かるかもな」
猛は渋る純を説得して、ファミレスで美香と会う約束を取り付けた。猛と一緒に現れた美香を一目見た純は、キラキラとした目を持った魅力的な女の子だと思った。不思議なことに和を思い出した。小柄で攻撃的な目が似ていた。ただ、美香は優しくはなかった。彼女は純の美しさを疑い、その仮面を引きはがそうとした。というのも、美香の兄は人前ではいい人を演じているが、実際は現役で医大に合格した自分の能力を鼻にかけ、傲慢で常に人を見下すタイプだった。兄に散々バカにされてきた美香は、頭から、兄と同じ医大生が繊細で純粋であるはずがないと思い込み、純の壊れそうになっている精神をいたぶるように試しにかかった。昼休みに、二人で学生ホールでカレーを食べているとき、美香は兄について切り出した。
「純君、兄のこと、どう思う？」
「ど、どうって、あ、頭のいい人だと思うよ。教授の質問の意図もすぐつかめるし、反応もいいし」
「ふうん、兄はかなり自信家だよ。みんなのこと、バカにしてる。人格的に難ありだよ」
「し、仕方ないかもしれないよ。頭の切れる人にとって、凡庸さは苛立ちの原因になるんだよ、きっと」
「でもね、わたしが患者だったら、人として、信頼できないような医者に診てもらいたくないな。純君は信頼できる？」
「し、信頼？　分からない」
答えを出そうと考え込む純がおかしくて、美香はク、ク、クと笑った。
「純君って、真面目なんだ。ハハハ」
次の日、放課後、美香は純を自分の家に連れて行った。

「ただいま」と言いながら、純を自分の部屋に引っ張って行こうとした。純は「お邪魔します」と居間にいる母親らしき人に声をかけ、美香の後について行った。部屋には机とベッドと本棚があった。二人は何となくベッドの端に座った。本棚には小説から専門書まで本がギューギューに詰め込まれ、あふれた何冊かがベッドに散らばっていた。
「ほ、本が好きなんだね」
「そうよ。いろんな人になれるでしょ？」
「い、いろんな人？」
「鬱っぽい男とか、心を病んだ犯罪者とか、快活な女の子、貞淑な妻、破滅型の人間も疑似体験できるよ。ま、人間ってもともと多面的なものだけどさ」
「で、でも、本当の自分がみ、見えなくなったりしない？」
「本当の自分って何よ？　兄なんか見かけはとっても優しくていい人よ。両親だってそう思ってるわ。医大生はそれだけで、ブランドだから、女の子にも持てるのよ。何人も女の子、引っ張り込んで何回か寝たら、ポイ捨て状態。バカな女につける薬はないねって。ふざけてるでしょ？　彼の本性は？　分かる？」
「き、君はお兄さんのこと、ほ、本当は、だ、大好きなんじゃ…」
　美香は怒りを含んだ目で、純をじっと見た。そして、少し笑ったかと思うと、顔を近づけてきて、純の唇に触れた。されるがままになっていた純も、美香が舌をいれてきたので、思わず突き飛ばしてしまった。
「何よ。純粋な純君は女の子とキスもしないの？」
「ご、ごめん。ぼ、僕は君とキスしたくないんだ」
「そう、キスはしたくないの？　じゃ、これは？」
　そう言って、美香は純の体に覆いかぶさり、白い指を純の体に這わせ始めた。純の目には白い指が何本も自分の体を這い上がってくるのが見えた。
「うわっ！」
　純は美香の執拗な指を払いのけ、転がるように階段を下りて、いぶかしがる母親の視線を痛いほど感じながら、逃げた。背中で美香の笑い声を聞いたような気がした。
　ただ、その日の出来事はそれで終わりではなかった。美香が兄におもしろおかしく話したので、猛の知るところとなり、妹をバカにされたと怒った猛は純を無視するようになった。もともと彼にとって、自分とは真逆の生き方をしている純の存在は肯定しがたいものだったのだ。それに加え、兄妹の間のねじれた愛憎感情が純への憎しみを増幅させたようだった。一回生のリーダー的存在である猛にならって、他の学友も純の存在そのものを否定するような態度を取り始めた。純は孤立し、どんどん自分が縮んでいくような恐怖を感じていた。

友達

　その夏、市役所に勤めている良平は、東京の大学に通っている聡が帰省した折に、純に連絡を取り、久しぶりに三人で会う約束をした。純が医大に合格して、実家から通っているらしいことを聞きつけたのだ。純を一目見た二人はその変わりように愕然とした。ガリガリに痩せて、目ばかりギラギラしている。

「どうしてる？　勉強とかきついのか？」
聡が尋ねると、純は何度も目をシパシパさせながら、ポツリと言った。
「う、うん。お、おもしろくない」
「医学部でも一回生の時は一般教養やるんだろ？　退屈かもしれないな」
良平がとりなすように言った。
「み、みんな、ぼ、ぼくのこと、変な目で見るんだ。あ、あいつはバカだから、医者にはなれないとか、教授もあいつには匙をなげてるぜとか噂してるんだ。ぼ、僕が話しかけても透明人間を見るように、いつもいつも彼らは、ぼ、僕の向こうを見てるんだ」
誰の目も見ようとはせず、抑揚のない声で一方的にしゃべる純の様子を見て、二人はただごとじゃないと顔を見合わせた。
心配になった良平は聡が東京に戻った後、一人で純の実家を訪れた。チャイムを鳴らすと同時に、勢いよくドアが開いて、小学生低学年くらいの男の子と、まだ学校に行っていないような女の子が飛び出してきた。続いて四十代の女の人が顔を出した。
「あぶないよ。車に気を付けて！　明、光を頼むわよ」
「はーい！」
二人は競争をするように近くの公園に駆けて行った。良平に気付いた女の人が言った。
「純のお友達かしら？」
「高校の時一緒だった土田良平です。夏に純と会ったんですけど、様子がおかしかったので…」
「心配してきてくれたのね。ありがとう。どうぞ上がって」
そのとき居間からこの家の主、つまり純の父親に当たる、がっしりとした男の人が出てきた。
「こんにちは」と良平が挨拶すると、
「珍しいね。純の友達か？　まあゆっくり話を聞いてやってください」と言い残し、二人の子どもの跡を追った。若い継父と母の生んだ半分血のつながった幼い兄妹に囲まれて、純はどうやって自分の居場所を見つけてきたんだろうと、良平は心が痛んだ。
「おばさん、純はみんなと話してますか？」
「高校の時は生き生きとしてたし、普通にしゃべってたのよ。受験に失敗して塾の寮に入ったから、浪人時代の一年間はほとんど帰ってこなかったわ。勉強ばかりしてたみたい。大学合格して、こっちに戻ってきたんだけど、部屋に引きこもってしまうことが多くなって…」
「学校は行ってるんですか」
「医者になるってずっと頑張ってきて入った学部でしょ。行こうと努力してたけど、だんだん家にいることが増えてきて、夏休み明けから行かなくなっちゃったの。わたしも働いているから、純の行動すべて把握してるわけじゃないけどね。吃音も瞬きもひどくなってきたみたいだし、大学のみんなとコミュニケーション、取れてなかったんじゃないかしら」
「お父さんとは？」
「父親の方は純と向き合うのあきらめたみたい。あの子が中一のとき、わたし、今の主人と再婚したんです。もう大きかったから、新しい父親になつくことはなかったわ。二人とも努力してましたけど、純の口から『おとうさん』って言葉、聞いたことがなかった」

「純の部屋に行ってもいいですか」
「二階に上がって、左側の部屋よ。よろしくね」
母親のすがるような視線に送られて、良平は純の部屋の前に立った。
「おい、純、入れてくれよ」
少し間があって、ドアが開いた。机の上に描きかけの水彩画と絵具を何色か置いたパレットがあった。
「絵、描いてるのか」
「ああ、か、形があって、い、いろんな色があるだろ」
「どうして絵なんだ？」
「ぼ、僕の今いる世界はし、白黒の世界なんだ。昔はぼ、僕の周りにいろんな色があふれてた。あ、赤や黄色、青、緑、ピンク、水色、む、紫も。でも、だんだん色の数が減ってきちゃった。で、白と黒」
「景色描いてるのか」
「は、花もかくよ。こ、これは、ぼ、僕」
白い画用紙にピンクのバラが一輪、描かれていた。バックは白いままだった。自画像はほとんど黒く塗りつぶされている。目だけ白くて不安が掻き立てられた。
「学校は行かないのか」
「と、時々行くよ。で、でも、行くと、いろんな声が聞こえてきて、う、うるさいんだよ。うわっ！　良平の後ろの壁を白い指が這ってるよ。あ、あぶない」
「何、何？　白い指？　どこだよ」
飛びのいて、後ろの壁を見たが、何もない。純はおびえたように壁を凝視している。良平には見えない白い指を目で追っている。会話しているとき、純は良平とは目を合わせない。純の目は良平をスルーして、遠くを見ているような感じなのだ。
「おまえ、カウンセリング、受けに行かなくちゃだめだよ。心がとても疲れているみたいだよ」
「カ、カウンセリング？」
「心を診る医者と話すんだよ。自分の心と向き合うことになると思うけど。今のままじゃ、医者になれないぞ」
「医者か…、そうだね」
そう言い終わると、もう良平には興味を失ったように、また絵の世界に戻って行った。良平はそっと部屋を出て、階段を下りると、心配そうに顔を出した母親に言った。
「二人で心療内科に行って、カウンセリング受けた方がいいと思います。大学に入ってから、鬱になる男子学生は少なくないと聞きました。早く手を打たないと、回復が遅れるようですよ」
「そうね。やっぱり変でしょ？　純」
「うん、どっか壊れつつあるような…」
「分かったわ。何とか病院に連れて行くわ。来てくれてありがとう。また、顔を見せてやってね。あの子、高校の時が一番輝いていたみたいで」
「クラスのみんな、あいつの純粋さを大切にしていたから」
良平は純の家を後にして、公園を通り過ぎた。純の父親と二人の子どもが楽しそうにボ

ール遊びをしていた。アンパンマンの絵のついた赤いボールが親子三人を繋ぐように跳ねていた。良平は辛くなって、目をそらしていた。

良平は一週間ほど迷ったあげく、和に電話をした。

「和、元気？」

「どうしたの？　何かあった？」

「うん、純のことだけど、あいつ、おかしいんだ」

「おかしいって？」

「せっかく医学部に入ったのに、あんまり学校に行ってないんだ」

「あのね。わたし、純に完全に振られたんだよ。純が一浪を決めたとき、勉強に集中したいからって」

「えっ？　そうだったの？」

「合格したことも知らせてくれなかった。純は看護学校の学生と付き合ってるから、井浦さんももう純のことは忘れた方がいいよって忠告してくれたクラスメートもいたわ。わたしは純に必要とされてないのよ。今更会えないでしょ？　わたしに何ができる？」

「あいつ、絵、描いてるんだよ」

「絵？」

「和は美術部だっただろ。それで、純が和のこと考えてるのかなって思って…。暗い自画像、描いてたよ」

「大学というか、もう少し前の予備校時代から徐々に変わってきたと思うけど、何があったんだろう」

「俺、カウンセリング受けるように言ったけど」

「プロの第三者に診てもらうのがベストだと思うよ。シュバイツァー博士みたいになりたいってキラキラしてたのにね」

「なんか純、かわいそうで…」

和は純のことが気にかかっていたから、今すぐにでも会いたかった。何度も何度も純の電話番号を押そうとした。が、行動するのはためらわれた。勉強の邪魔になるからと切った女から連絡をもらっても、余計に鬱陶しくなるのじゃないか、自分だったら、きっとそう感じてしまうと思うと、無理に会う機会を作って、純に余計に嫌われるようなことは避けたかったのだ。幼稚な発想だが、和にも女の意地もプライドもあったのだ。しばらくして、良平から純がカウンセリングに通いはじめたと聞いて、安心し、純と接触することは保留となった。

カウンセリング

純がカウンセリングに通いだして、もう半年になる。初めて部屋に通されて、カウチに横になるよう言われたときは驚いだが、医師と面と向かって話すのではなく、カウチに寝転んで、自分の頭の後ろから聞こえてくる医師の指示に従うスタイルはリラックスできた。

「今電車に乗っています。隣の席の人にあなたが窓から見える風景を教えてあげてください。何が見えますか」

「ま、窓から海が見えます」

「どこの海かわかりますか」
「し、白浜に行くところだから、た、田辺あたりの海かな」
「だれが隣に座っていますか」
「は、母です。ち、父も向かい側に座って笑っています」
「君はいくつぐらいかな」
「ま、まだ小さいです。ほ、保育園に行ってる」
「白浜に何をしに行くのかな」
「ち、父の母が住んでるから、遊びに行くんです」
「楽しそうだね」
「そ、そう。う、海が近いから。う、海は好きです。ずっと見てても飽きません」
　そんなふうに始まったカウンセリングは医師とのラポートも築かれつつあるため、純もかなり心を吐露する発言をするようになってきた。
「お母さんのこと、聞かせてくれないか」
「は、はい」
「お母さんのことは好き？」
「も、もちろん好きです。は、母は父が死んでから、ぼ、僕を一生懸命育ててくれたんです。で、でも、母が父を忘れてしまったことは理解できません。というか、ち、父とは全く対照的な人と再婚して、そ、その男の子どもを二人も生んだんです。は、母はただの女になってしまったような気がしました」
「お母さんには支えてくれるパートナーが必要だったんじゃないか？」
「ぼ、僕がいたのに。ぼ、僕と母は二人で生活できていたんです」
「でも、君はまだ子どもだったからね」
「もう中学生だったのに」
「新しいお父さんは？」
「あ、あの人は、ぼ、僕に気を使ってくれたし、優しかったけど、お、お父さんじゃないもの」
「今のお父さんと一緒に暮らすのは苦しい？」
「す、少しね。で、でも、仕方ないし」
「そうか」
　カウンセリングはさらに進み、予備校や大学での純の人間関係におけるストレスを明らかにしていった。人とのかかわりを極度に絶った浪人時代と、悪意に満ちた学友やミドリに振り回されるような大学生活は純の心を徐々に蝕んでいったようだ。カウンセラーは今までのカウンセリングを踏まえて、佐希子に語った。
「症状としては幻覚、幻聴、被害者妄想などが認められ、典型的な精神分裂症を示しています。現代は統合失調症と呼ばれることが多いですが。思春期に発症するケースがよく報告されていますね。原因はというと、やはりお母さんの再婚になるでしょうか。純君はお母さんが再婚したことで、お母さんと二人の生活が奪われたと感じていたようですね。つまり、新しいお父さんは純君にとっては略奪者なんです。その怒りを面に出して、暴れてしまえばよかったのですが、優しい子だし、頭もいいので、自分の悲しみや怒りを自分の中に閉じ込めてしまった。お母さんが略奪者の子どもを二人生んだことも本当は受け入れ

がたい事実だったのかもしれません」
「わたしの再婚が純を壊したのですか」
「そんなふうに考えると、お母さんが参ってしまいます。純君はもともと人並み以上に繊細で純粋な男の子だったのです。多分亡くなったお父さんが大好きだったのでしょう。尊敬もしていたと思います。だから、お父さんがいなくなって、ぽっかり空いた空洞をお母さんを支えようという決意で埋めてきた。まっすぐに頑張った。だれど、ある日、知らない男が来て、そのポジションについてしまった。純君はどうしていいか分からなくなったのでしょう。高校時代は友達にも恵まれ、自分を肯定的にとらえることができた。ところが、人と隔離された浪人時代に心の平衡感覚が乱れ始め、新しい環境である大学での学友やガールフレンドとの軋轢が純君に致命傷を負わせた。」
「純をどうしたら救ってやれるのでしょう」
「純君のストレスを軽減するためにも、しばらく純君を今の家庭から出してやってはどうですか。亡くなったご主人のご実家が白浜にあると伺いました。純君は海も好きなようだし、無理でしょうか」
再婚してからは疎遠になってしまった元夫の実家に頼るのは気が引けたが、純の苦悩が少しでも軽くなって、健康になるのならと佐希子は必死の思いで哲の母、西島幸子に電話をして、包み隠さず、すべてを話し、純をしばらく預かってほしいと頼んだ。幸子は何の音沙汰もなかった元嫁からの電話に驚きながらも、しっかり聞いてくれた。幸いにも幸子は七十を一つか二つ越えているが、元気に民宿を営んでいる。息子の一粒種のため一肌脱ぐのを厭わなかった。
「電話してきてくれてよかったわ、佐希子さんが倒れてしまう前に。純はガラスみたいなところのある子やったものね。いつでも連れておいで。純がいたかったら、いつまででもおいてあげるし」
「ありがとうございます」
佐希子には、あるがまますべて受け入れてくれた義母の言葉が涙の出るほどありがたかった。

個展

純は結局医学部を二回生の夏に中退し、白浜の西島家に厄介になることになった。静かで穏やかな時間がゆっくりと流れて行った。純は客のある時は民宿の手伝いをしたが、ひまなときはツンツルテンのジャージを着て、海や街中に写生に出掛けた。近所の人たちは初めは昼間から絵を描いてる、ちょっとおかしな若い男の出現に不安げな様子だったが、別に暴れるようなこともなく、民宿で掃除したり洗濯したりしているのを見て、安心したようだった。「ああ、また西島のところのお兄ちゃん、絵、描いてるなあ」という目で受け入れてくれるようになった。
そうやって二年ほど平穏な日々が過ぎた夏の終わりころ、純は自分の描いた絵を並べて、つぶやいた。
「み、みんなに、ぼ、僕の絵を見てもらいたいな」
それは、純が自分から他の人にかかわりを持とうとした、つまり、自分の周りの社会に

アピールしようと決めた大切な瞬間だった。純はそう思い立つと、すばやく行動した。白浜から和歌山市にやってきて、小さな画廊に個展を開きたいと申し出た。個展するには作品数も少なく、額に入れていないものが大半という状態に、オーナーは初め首を縦に振らなかったが、教師になった聡と市役所の良平のとりなしで、三日間ギャラリーに展示できるようになった。オーナーから、個展の期間中会場管理もかねて、芳名帳に記載を促したり、作品の説明をしたりする人を一人置いてほしいと言われた。純はこのとき、なぜか今までずっと忘れていたはずの和の顔を思い浮かべた。高校を卒業して以来、話す機会も会う機会も作ろうとさえ思わなかったのに、今なぜ和なのか、純自身にも説明がつかなかった。和のことが頭に浮かんだら、居ても立ってもいられなくなって、気が付けば、和の電話番号を押していた。

「も、もしもし、井浦さんのお宅ですか」

「はい、そうですけど…」

「か、和？　ぼ、僕、純です」

「滝本純？」

「そ、そう」

「大学中退したって聞いたけど、どうしてるの？」

「し、白浜の親戚の家にいるんだ」

「白浜…」

「こ、今度、わ、和歌山市のギャラリー『道草』で、ぼ、僕の絵の個展することになったんだ」

「絵、描いてるって良平が言ってた…」

「で、ら、来週の、土、日、月の三日間、受け付けみたいなこと、やってほしいんだけど」

何年もなんの連絡もくれなかったのに、突然電話してきて、個展の受け付けを頼むなんて、どうかしてると思いながらも、純の声が聞けて、和はうれしかった。

「急な話だね。月曜日は無理だけど、土、日は大丈夫よ」

「じゃ、ど、土曜日、九時に『道草』で」

「あのね…。じゃ土曜日」

和は、言いかけた言葉を飲み込みながら、わけのわからない依頼を引き受けてしまった自分が滑稽だった。今でも和にとって純は特別な存在なのだ。会うのは怖いけれど、会いたかった。

土曜日、和は黒いカットソーに青いタイトスカートを履いて、はやる心を抑えつつ、ギャラリーに向かった。

純はそこにいた。袖口の綻んだテカテカのジャージを着て、無精ひげを生やし、缶コーヒーを手にした薄汚れた純が存在していた。

「ひ、久しぶり」

純はオドオドとした目で和を見た。和はその中に何があるのか必死で探した。でも、彼の目は何も映していなかった。

「き、昨日の夜遅く和歌山に着いたから、し、深夜営業してる、え、映画館にずっといたんだ。ちょ、ちょっと眠い」

「そう…」

和はマジマジと純を見つめた。あまりの変わりように、五年の間にこんなにも純を疲弊させてしまったものの正体は一体何だろうかと考えずにはいられなかった。
「か、和は、こ、高校のとき、あ、油絵、描いてただろ？　絵が好きだと思って」
「そうだけど」
和は部屋に展示された純の作品を一つ一つ見て回った。一点透視法で描かれた道路と両脇の商店街には様々な色が踊っている。ゴロゴロとした岩とコバルトブルーの海、山をとらえた風景画にはビリジャンがグラデーションを作っている。濃い緑のかぼちゃと赤紫のさつまいもが無造作に転がり、赤いバラは一本だけ植物画のように精密に写生されている。どれも子どもが描いたような幼稚な絵で、水彩絵の具を混色せず、チューブから出したまま塗ったような素朴な絵たちだった。色を混ぜないためか、濁りのない明度の高い絵が並んでいた。純はその一つ一つについてポツリポツリと解説するのだった。
「純、絵が好きだったっけ？」
「す、好きだったけど、か、描いたことはなかったんだ。い、今、少し見える範囲が、ひ、広がってきた感じなんだ。い、今までは、め、目の前三十センチしか、み、見えてなかったからね」
「少しよくなった？」
「そ、そう。い、色もあるし」
「白浜の生活が合ってるのかな？」
「そ、そうかもしれない」
「よかったね」
和は土、日、ギャラリーに六時間ほどいて、画材を買いに来たついでに個展に寄ってくれるお客さんの相手をして過ごした。純が個展を開くことを和は高校のクラスメートの女の子たちにも知らせたので、由紀と昌美が連れ立って、顔を出してくれた。二人とも変わり果てた王子様の姿に唖然としながらも、純の得意げな解説に耳を傾け、時々質問もしていた。二人が帰るとき、ギャラリーの入り口で、和、由紀、昌美の三人は互いに顔を見合わせたが、言葉は出てこなかった。
純の精神は回復に向かっているのだろうか。和には判断がつきかねた。純にはいろいろ聞きたいことはあったけれど、純の高校以降の生活を全く知らないことを思い出し、どこまで突っ込んで尋ねることができるのか分からなかった。下手に突いて、回復の邪魔をするのも怖くて、当たり障りのないことしか話せなかったのだ。純は三日間の個展を終えると、また白浜に帰って行った。

和の現実

和はその頃高校で生物を教えていた。まだ講師の身分なので、来年もまた教員採用試験を受けなければならない。同じ時期にその高校に配置になった英語の高井譲と去年の秋くらいから付き合いはじめた。授業に工夫を凝らし、生徒を参加させようとする高井のやり方に刺激を受けることも多い。ただ、彼の熱さを鬱陶しく感じることもあった。
「午後の授業では、生理的に仕方ないところもあるけど、居眠りする子がいるの」
「生徒の頭を動かすような授業ができていないんじゃない？　まず、体を動かさざるを得

ないようなタスクを考えてみたら？」
「うん、そうなんだけど」
「授業中の居眠りを認めたら、教師の負けだと思うな」
「負け？」
「つまらない授業をし続けることになるよ」
「授業は教師と生徒の勝負なの？」
「そんな一面もある。僕は負けない」
「そう」
　この人は挫折なんて経験したことがないんだろうなと、和はそっと横顔をうかがった。高井に今年の春プロポーズされて、断る理由も思い当たらず、承諾してしまった。純と再会した翌週の日曜日には挨拶もかねて、高井の実家に遊びに行く予定だった。彼は心も体も健康だし、仕事もある。常に前向きで夏休みにはカナダに短期語学留学も考えているようだ。家族になって、子どもを産み、育てるには理想的な相手なのかもしれない。でも、和はなんとなく心が弾まない。いわゆるマリッジブルーなのかもしれないと思いつつ、彼の実家の玄関に立っていた。玄関横には盛りの過ぎたサルスベリの薄紅の花が和を迎えてくれた。譲が「ただいま」と言って、ドアを開けると、元気そうな彼の母親が満面の笑みを浮かべて、出てきた。
「いらっしゃい。お待ちしてたのよ。さあ、どうぞ」
「失礼します」
　和も笑顔で答え、夕餉の席に案内された。食卓には母親の作ったごちそうが並び、譲は母親をねぎらいながら、席に付いた。その席には中学の校長をしているという少しいかつい父親と譲にそっくりの譲とは三歳年の離れた妹がいた。和より一歳年上になる。みんな忙しく箸を動かしながら、和の人となりを知ろうといろいろな質問をした。まず父親が口火を切った。
「和さんはどうして生物を？」
「入った大学に私が学びたかった分野の先生がいなかったもので、それなら理科の教員免許を取って、好きな生物を教えることを仕事にしようと。小さい頃から虫や爬虫類や両生類が好きだったんです」
「えっ！　気持ち悪！」
　妹が毛虫でも見るような目で和を見た。
「生物を学ぶことは人間を知ることにもつながりますし」
　和は妹を無視して答えた。すると、少し気を悪くしたらしい母親が和に尋ねた。
「和さんは今講師なの？」
「はい、まだ採用試験に合格していませんから」
「来年こそがんばってくださいね。ねえ、あなた」
　と校長である夫に同意を求めた。夫はどう言うべきか口ごもっていると、譲が和をからかうように
「和は試験勉強しないからね」と言いながら、笑った。母親は合点がいったとばかりに和に忠告する。
「おもしろくないこともしないとね。前に進みませんよ」

「ええ」
和は仕方なく一応母親の顔を立てる。調子づいた母親は続ける。
「結婚して、赤ちゃんができたら、任せてね。まだまだ子守りはできるわよ」
「はあ…」
「でもね。子守りも年を取ると、きついらしいから、なるべく早くお願いしますよ」
「まだ何も…」
和はわたしのレールは敷かれているのかしらと隣の譲に助けを求めたが、彼は笑っているだけだった。それから後の会話は適当に話を合わすだけで、和は顔にぎごちない笑顔を貼り付け、しのいだ。帰りの車の中で、和は譲の本音が聞きたいと思った。
「わたし、すぐ子ども産まなくちゃいけないのかな」
「若い方が体力もあるし、楽だろ？」
「で、お母さんに子どもをみてもらいながら、働くの？」
「仕事は続ける方がいいんじゃない？　育休もあるし、うちの母親、元気だからね」
「そう…」
譲の家族は悪気のない、いい方たちなんだけど、自分たちの考え方が当然万人に受け入れられると思い込んでいるところが、和にはちょっとしんどく感じられた。二十数年それぞれの家庭の規範に従って異なった生き方をしてきた二人が、自分たちの新しい家庭を妥協しつつ、作り上げていくのは難しいようだ。自分たち二人だけで築くのなら、ゼロから積み上げていくわけだから、まだやりやすいが、互いの両親が関与してきて、自分たちのやり方を当たり前のように持ち込むと、ことはややこしくなる。両親が少し距離を置いて、突き放して付き合ってくれれば、若い二人のカラーの家庭が成り立つだろうが、日本の結婚の場合、両親を切り離して考えることは不可能に近い。互いに自分たちの流儀を押し付けようとするだけで、そこに話し合いも説得の努力も効果は期待できない。結局、合うか合わないの世界になってしまうのだ。和は譲の家族とは会わないと結論を下した。それで、譲の実家を訪問して、一か月ほど経ったころ、結婚話を白紙に戻したいと申し入れた。
「わたしは、あなたのお母さんが描いているような未来を提供できないし、提供するつもりもないの。自分の人生、自分で決めたい」
「話し合えばいいじゃないか。どの程度まで協力してもらうかとか」
「たぶん無駄なのよ。理解できても、納得できないまま、無理して付き合っても、お互い疲れるだけなのよ。そのうち、憎しみも生まれる…」
「君は僕のことはどう思っているの？　親は親だろ。まず二人の気持ちが大切だよ」
「そうなのよね。わたしには打算があった。あなたと結婚すれば、安定した生活が約束されてるような気がしてた。あなたのことは前向きで健康な人だと思ってる。でも、今あなたの健康さが耐えられない。あなたには理解できないと思うけど。いっしょにいると疲れてしまう。わたしがわたしでなくなるような気がするの」
「君の言ってること、分からない。要するに、君は安定した生活が送れるなら、だれでもよかったのか？　でも、今は僕や僕の家族といたくない？」
「…そう」
譲は呆れたように和を一瞥して、背を向けると、足早に歩き去った。和はホッとする一方で、一般的な幸せというものを手放してしまったかもしれないという寂しさを感じてい

た。
　四月になると、一年契約の講師である和は、別の学校に異動になった。譲と婚約破棄したことが同僚たちにも伝わり、なんとなく居づらくなっていたので、助かったと思った。心の軽くなった和は久しぶりに良平に会って婚約解消の話をした。
「和、おまえ、まだ純のこと引きずってるんじゃないのか」
「そうかもしれない」
「純の病気は五年以上も前に発症したんだ。薬も飲んだし、カウンセリングも受けたけど、治ってない。長引けば長引くほど、回復は難しいみたいだ。白浜に移ってからは大分表情も明るくなって落ち着いてるけどね。和は自分の人生、しっかり生きないとだめだと思うよ。この前は和に純を支えてもらえたらって思ったけど、今はそれは無理だってわかる。和が感情に任せて、中途半端に純と関わるのは純にとっても、和にとっても、いい結果を生まないと思うよ。残念だけど、僕たちもう高校生じゃないんだから…」
「分かってる。分かってるのに、どうしてこんなに純にこだわってしまうんだろ」
「それは…、和にとって純は初恋の人だし、純は美しいからね。比べちゃだめだよ。純と他の人と」
「そうだよね。そうなんだけど」
「現実から逃げないで、自分の地場を固めなきゃ」
「うん」
　和の現実は高校生の頃描いていた自分の未来像とはほど遠いものになってしまった。あの頃は努力すれば、なんでもできる、夢は叶うと信じていた。それを阻む要素が経済的な問題もさることながら、己の能力不足だと思い知らされた大学時代だった。和が臨んだ研究には物理と化学の知識がかなり要求された。しかし、和は受験科目にその二科目を選択していなかったこともあって、大学の専門科目としての物理化学や有機化学などに、ついていけなかった。数学でも抽象的な概念に進むと、理解できなかった。かろうじて卒研を仕上げ、理科と数学の教員免許は手に入れたが、教える科目となると、消去法的に生物が残ったのだ。いまだに講師という中途半端な地位に甘んじているふがいなさを、父はことあるごとに皮肉交じりに責めた。「期待外れだった」などと面と向かってなじられると、和自身が一番感じていることだけに凹んだ。幼いころから両親とはウマが合わなかった。貧乏なのは仕方がないが、父は常に高圧的で母はひたすら従順だった。嫁姑問題もあって、和が高校生の時、離婚の話も出たが、生活力のない母は横暴な父の庇護のもとにとどまることを選んだ。和は家を出たかった。大学受験がチャンスだったが、「学費も生活費もアルバイトして自分で出すから」と言っても、「おまえが病気になったらどうするんだ？　こっちの負担になるんだ。弟も控えてるんだぞ。自分のことばかり考えるな」と言われると、あきらめるしかなかった。それを跳ね返すほどの強さが和にはなかったのだ。結婚という形で家を出るのが近道だと頭のどこかで考えていたことが譲との結婚を決めた理由かもしれない。輝きを失い、事象だけが流れていく毎日。泣くことも笑うこともない無味乾燥な日常。時間は和に諦念だけを強要しつづけた。和は心の中で純に語りかける。
「いつも前向きにがんばらないとだめなのかな。現実から逃げだしたら、負け犬になってしまうけど…。ちょっと疲れちゃったな。純。どうしたらいい？」

同じ風景の中で

夏の終わりの白浜に海に柔らかな日差しが降り注いでいる。白い砂浜を三人の男女がゆっくりと歩いている。先頭を行く良平が振り返って和に聞く。

「どう？　だいぶ落ち着いた？」

「三月にこっちに来たから、もう半年経ったのね。生活のリズムができてきた感じかな」

「びっくりしたよ。いきなり純のとこに行くって聞かされた時」

「思いっきり逃げてしまおうって思ったの」

「逃げる？　何から？」

「いろんなしがらみかな。両親、生活、自分…。もう降参、負けちゃった」

「優等生の和が？」

「優等生だったのは、高校までよ。後は落ちこぼれ…。そんな中で、いつだって、純は、純の存在はわたしにとって救いだった。辛くて死にたい時も、キラキラした純がこの世界にいるんだから、まだわたしも彼のいるこの空間にとどまりたいって思った。純はわたしの心のレフュージみたいなものなの」

「何なんだ、レフュージって」

「避難所って訳しちゃうと変なんだけどね。ジョニ・ミッチェルの曲にそんな言葉があったのよ。ああ、これなんだなって」

「結婚は？」

「できないよ。そんなこと考えてない。余裕もないし、責任も持てない。今のまま二人でいたいと思ってる」

「そうか」

「第一、わたしのプラトニック片思いなんだよ」

「長い片思いだよね」

「そうね。十年ほどになるかな？」

「純は？　このままでいいのか」

「ぼ、僕は和がそばにいてくれて、う、うれしい」

「生活は？」

「塾とまでいかないけど、補習教室みたいなこと、してるわ。純のおばあちゃんの家の一室を借りてね。純も数学と理科は教えられるしね」

「そりゃあ、いいね」

「二人で絵も描いてるのよ。絵に描きたい場所、二人で決めて並んで座って、同じ風景を眺めながら、二、三時間黙々と手を動かすのよ。海の絵が多いかな」

「じゃ、幸せなんだね」

「そうね。ピースフルって感じかな」

純と和は顔を見合わせて少し微笑んだ。良平には純の瞳に和が映っているのが見えた。

（了）

（参考）

岩波明「心に狂いが生じるとき」（新潮社、2008）

計見一雄「統合失調症あるいは精神分裂病」(講談社、2004)
北山修「劇的な精神分析入門」(みすず書房、2007)
小此木啓吾「精神分析ノート」(日本教文社、1965)